

社会学的視点と問題発見

— ディス・コミュニケーションと「社会的自由」 —

Sociological Viewpoint and Discovery of Problem

— Dis-communication and 'Social Freedom' —

渡辺 牧*

Osamu Watanabe

はじめに

本稿は、生活者の日々の喜びや悲しみに根ざして、いかにして社会学的視点を形成してゆくべきかに関する基礎的検討をめざしている。

1980年代の日本の社会学研究は——60-70年代に、構造機能主義と、それに対するマルクス主義的視点の理論がせめぎあっていたのに比べて——、自由で個性的な発想と理論形成への幕が切って落とされた時代だった。⁽¹⁾

社会研究に限らず、科学とは、個別専門科学の研究対象を限定した実証とともに、専門の垣根を自由に越えて最大限、自由に発想してゆこうとする《想像力》、そして、既成の考えにとられることを疑って、《問題を発見してゆく》姿勢が不可欠である。

ともすれば、既存のパラダイムのもとで、《問題を解く》ことに、精力の大半を費やしがちな科学研究の矛盾が、根底から問われたのが、80年代だったのではあるまいか。

I 問題発見に根ざした視点

1980年代後半からの日本社会は、東京一極集中、対外摩擦、民活政策にまつわる諸問題、土地や株式の高騰と下落＝バブル問題など、社会

矛盾が噴出した時期であった。⁽²⁾ これらの社会問題に対して、「個人と社会」との関係を問う社会学は、現実のただ中からの「問題発見」に根ざした視点の検討を不可欠としているのではないか。

92年に亡くなったF. ガタリは、暮らしのただ中からの《問題発見》への重要な手掛かりをわたしたちに残したと思う。ガタリが《問題》としたのは、つぎのようなテーマだった。

因習そのものの権威主義、硬直した階層主義、視野の解放性を欠落させた専門主義、社会的抑圧に苦しむ民衆への共感を欠いた統御知。

ガタリは、社会における、マイクロ次元の動きによる社会の《変容》を問いかけた。素朴単純な一面的な正義漢、共同体の共同幻想に寄りかかった社会変革理論とは、ガタリの問いかけは、全く異質だった。《とらわれのない視点とは何か》を、ガタリは問いかけていた。

ガタリの残した《どんな対象も、主題も、複数の要素の開かれた集合としてとらえること》という問いかけは、社会学的視点の形成に対して示唆に富んでいよう（宇野邦一《1992：朝日新聞9月9日号》）。

*一般教育等

II 多様な視点の交錯

これまで筆者は、地域社会からの情報発信、個人生活史などについて実証的調査研究を進めてきた。国家、地域社会、企業組織が、中心と周縁、支配-被支配、役割分業などの社会的構造を内在しているのに対して、個人の生活史は、これらの構造形成の担い手としてミクロな次元にある。

したがって、国家や地域の構造論が巨視的な目配りを一般に出発点とするのに対して、個人の生活史研究とは微視的な視点を軸としていよう。

現代国家論においては、民主主義と全体主義、集権と分権の問題、地域論では中央集権と地方自治、住民参加と情報公開、行政エリアと生活圏のズレなど、「問題」設定そのものが巨視的な目配りを問うていよう。

だが、巨視的-微視的という視点は、実は、その双方が相互往来関係にあってこそ、社会研究に対してトータルな生きた視点になるのではあるまいか。

社会学は、構造機能主義への根底からの批判が呈示されて以後、学としてのアイデンティティは決して自明でない。

社会を制御するための知という、《上》からのアップ・ダウン的な「社会制御パラダイム」は、その目的から政策科学もしくは経営科学の性格を帯びよう。

それに対して、個別の、とくに虐げられてきた人々の解放をめざそうとする「解放的パラダイム」は、アンダードッグ（社会のなかで挫折をよぎなくされた人々）の悲しみへの共感に根差していよう。

以上の二つは、《現実の矛盾を変革しよう》という問題関心に根差している点で、実践的な知と言えよう。さらに、制御パラダイムと、解放パラダイムとは、対抗的というよりも、相互補完的なものとして位置付けられよう。

例えば、住宅困窮者の直面する苦しみの背景、住宅問題の社会矛盾を、困窮者サイドに立って

とらえようとすることは、解放パラダイムの柱となるが、その政策的解決のためには、地域福祉や土地問題、さらには財政的裏付けが不可欠となろう。

これに対して、もう一つ、K.マンハイムの言う「浮遊する知識人」という視点からの知がある。イデオロギー（政治的価値体系）を徹底的に相対化し、醒めた目で現実を分析しようという、知識社会学の視角からの認識論だ。

認識と実践、思考と行為との距離は、いかにあるべきなのか。社会理論を綿密に組み上げてゆく作業とは、つぎの意義があろう。

第1は、K.マルクスや、ケインズ、ハイエクのように、理論が、社会構造の変革、改革を提唱する巨視的な《社会思想》へつながる場合である。

科学の根底を転換させるパラダイム革命への条件は、「事実発見」に根差した理論的検証だろう。

例えば、高群逸枝の招婚婚実証に向けた日本女性史研究は、性差別という歴史的問題、生物学的性差（セックス）と文化的性差（ジェンダー）の問題、権威主義的な社会的性格の解明に接続している。

第2には、社会科学における経験的な実証研究における理論の役割として、発想への媒介としての「背後仮説」、準拠枠、さらには調査に臨む際の「作業仮説」といった役割があろう。

1970年代の社会制御にウェイトをかけた構造機能主義に対して、80年代には、シンボリック・インタアクション論（象徴的相互作用論）、現象的社会学が、個々人の内面に宿された個人からみた《社会性》を問題として、現代社会の《自明性》に問いを投げた。⁽³⁾

第3は、個別の科学間における理論上の討議だろう。科学の細分化の影響もあり、社会学と歴史学、経済学、文化人類学といった、一見、隣接領域であってさえも、自由な討議が進んでいるだろうか。理論には、《共通言語》から、《概念》への鍛練という作業が伴っていよう。

調査研究を通じての、背後仮説の検討、事実

発見とその記録、仮説の検証とは、究極はパラダイムにフィードバックされ、パラダイムの改変に立ち向かわないかぎり、社会学の自己刷新には無縁となってしまうのではないか。

Ⅲ 調査研究と「人々の生」

R. E. パークが身をもって示したように、フィールドでの実践的な調査研究は、人々の生き生きとした生身の《生》にふれ、そのなかから、社会問題に視野を開いていく特性があろう。

社会学を学び始めたときに、M. ウェーバーの社会科学方法論における「価値判断中立」論に接して、素朴なとまどいを覚えた。この違和感は、パラダイム（科学体系）の直接的担い手たる科学者たちの規範と、日常の生活世界（life-world）の規範とのギャップから生じているのではなからうか。

パラダイムが強靱なものになりうるかどうかは、《生活世界に錨をどこまで深く降ろせるのか》、すなわち、多様な生活史をもった生活者との《対話》《応答》がどこまでパラダイムにフィードバックされうるかにかかっている。

研究者が、自らの価値判断をギリギリまで禁欲することは、視点の移動、拡大と相まって、独善的な《価値まみれ》に陥る危険性回避のために、必要な条件だろう。

しかし、ひとりの生活者としては、移り行く日々、様々な主観的次元での決断をしなければならぬ。例えば、友人、恋人との出会いと別れ、職業の選択と転職など、自らの人生をどの方向に歩いていくべきか、無数の選択肢に直面しよう。

社会事象への相対的認識と、日々の実践との狭間を媒介するものについては、いかに考えるべきか。

「社会学的な視点からの社会調査とは何か」という問いは、人々の内面的な世界と、地位－役割論などで問題となる客観的位相とを、いかに考えたらいいのかに通じている。

言い換えれば、喜びや悲しみを含むわたした

ちの《経験》総体ををどうとらえるかに深く関係している。

実証科学は、手続きとして、発想の鍛練、仮説形成、実証を通じた仮説の検証を経て、科学的な概念の検討を進める。だが、社会学の場合には、研究者の研究対象である《社会》には、研究者本人も組み込まれているのだ。

研究者の背後仮説がいかなるものであるかにより、実証の仮説形成は大幅な差異を示すのである。

個人生活史の研究に決して限らず、社会研究には、生き生きとした息吹が大切だと思う、ここで言う息吹とは、研究対象との応答、相互作用を通じた《今を生きる》スタンスである。

Ⅳ コミュニケーションへの社会的視点

対人関係では相互了解から断絶、無関心などの位相、情報伝達では、報道における人権問題、巨大メディアによる情報操作など、コミュニケーションをめぐる社会問題が増大している⁽⁴⁾。

社会学とコミュニケーション問題との関係もまた、社会的事実まつわる客観性と、内面世界の主観性についての接点の検討、交通整理が必要であろう。芸術の創作表現と鑑賞のように、コミュニケーションそれ自体が想像力の次元にあって、内的体験が鍵の場合、客観的分析のみでは外堀に迫ったにすぎないだろう。

コミュニケーションを社会的視点からとらえようとするとき、現代史の変動とともに、個々人の生き方、さらには他者との出会いと互いの影響関係と深く関連しているという基本認識が大切であろう。（塚本【1985:17】、渡辺【1988】）。

Ⅳ－1 感性知としてのコミュニケーションへの接近

巨大メディアが発信する断片的な情報に、人々が振り回されがちな今日、《生》を個性的にこころ豊かなものとするどころか、社会規範に過

度に同調してしまう「過社会化」に陥りかねないコミュニケーション問題について、以下では考えてみよう。

コミュニケーションとは、伝達、共有される意味の明確さ、論理性に裏打ちされたお互いの「向上」や「幸福」を考える《理性知》に決してとどまるものではなく、怒り、悲哀、共感、笑い、歓喜、覚醒、無関心といった情動次元を内包する《感性》の関わる面の大きな人間行為であろう。

相互の意思疎通、共通理解を促進するための実用的なコミュニケーション論は、身近でわかりやすいものから抽象度が高くて難解なものへと段階的な説明、説得をしたり、写真・映像と文章との組み合わせにより、より臨場感あふれたイメージを喚起するといった実践技法であるが、これだけでコミュニケーション行為を解明しようとするのは表層的であろう。

本来、市場経済システムの枠の中で目的合理性を要件とする「経済行為」に比べて、コミュニケーション行為は、「藪の中のような」人の深層心理を含めた内面が深く関わるだけに、定義は簡単ではない。

ただし、コミュニケーション行為への視点の《とっかかり》は、わたしたちの経験を外すことはできない。理性知の底深くに感性知を見たひとりの社会学徒は、つぎのように言う。

「我々は《社会》を、その手触りによって、直接に肌を感じとり《経験》している。《経験》は、生活におけるものであるがゆえに、我々に抜き差しならぬものとして迫ってくる」（江原由美子【1978:34】）。

社会的な規範、価値、規則を人間が学習し、体得してゆく過程を「社会化」と概念化し、支配的規範から外れてしまうことを「逸脱」ととらえる見方は、規範の内実への検証がない限り、規範に同調できぬ者を抑圧してしまう危険性がある。

例えば「東京で東北の方言で話したら馬鹿に

された」とか、「考えがまとまらずに押し黙りがちでいたら、引っ込み思案だと言われた」ケースは、コミュニケーションをめぐる抑圧の一端である。

こうした問題について、P.ゴルセンは、言語とコミュニケーションの「標準的な物化に抗する」ための方法的示唆を与えている。

ゴルセンは、狂信者、非社会的な人間、どもりや、言語の原作者、分裂病者らの隠語を、価値否定的にみるのではなく、そうした表現が彼らのほかならぬ自己防衛的な行為だと解釈する。ゴルセンは、コミュニケーション拒否を、言語上の一形式としてとらえている。

狂信者はマイナス値、正常人はプラス値という社会通念に対して、ゴルセンは反駁する。

「分裂病者の病理学を美学化し市場化すること（このことは境界にとらわれない市民的美学の抑圧的機能であったし、現にそうである）ではなく、むしろ、分裂病者と非分裂病者の相互作用の当事者たちの中の諸経験を相互的、等価的に交換しあうことが重要である」（P.Gorsen:【1972→1979:182】）。

ゴルセンは、シュールレアリズム、表現主義などの前衛芸術にみられる、支離滅裂、あるいは失語症的言語は、使い古され陳腐化した言語に対して「まじめに評価されるべきサボタージュ」だと言う。

具体的には、「無言症、反響言語（おうむがえし、答弁衝動）、他人には意味不明な一人言などの表現方法は、芸術では、コミュニケーション批判と、言語の仮面剥奪の様式手段へと解放される可能性をもつ」と述べる。

IV-2 関係性としてのコミュニケーション

以下では、コミュニケーションへの視点更新について検討しよう。

敗戦後のテレビの普及は、日本各地の固有の歴史文化を映した言葉を破壊し、画一的な「標

標準語」に共通言語の機能を与えた。地方出身者が上京して、方言のなまりにコンプレックスを感じた事例は無数だ。

あたかも標準語が《正》、方言は《負》であるかのように、言語の価値を固定化させる社会的表出装置は、コミュニケーションをめぐる差別問題を発生させよう（塩見鮮一郎【1982】）。

方言は、その地域の歴史、民俗、生活文化を色濃く宿しているのに対して、標準語は、ローカルティを捨象することによって伝達効率を得たといってもいい。

だが、地方を訪ねると、方言はまだまだ生きている。と言うよりも、大阪や京都のように、地域の伝統的言葉づかいが生活にしっかりと根づいている事例は少なくない。

東京のテレビ局が流す標準語と、日常生活で使う方言とが同居しているような二重性がみられる。

一方、コミュニケーションの社会問題は、情報メディアからの情報が、わたしたちに、身をもっての《実体験》と、間接的な映像などによる《疑似体験》との違いを不鮮明にさせつつあることにもみられよう。

情報氾濫は、現代人に、生身の経験という《生》の大切なものを見失わせているのではないか。

これからの時代のコミュニケーションを考えるためには、送り手-受け手=主体-客体を固定視した二元論ではなく、受け手もまた主体に転化する文脈、すなわち《主体》形成への視点更新が不可欠であろう。

そこでは対面的相互作用において、経験は行動の函数であり、経験も行動もつねに他者ないしは他の物との関係のなかにあるという視点が重要である（R.D.Laing【1967=1973:18】）。

竹内成明は、コミュニケーション理論が、その視角を、①自覚的な情報伝達、②情報がつくりだす送り手と受け手の現実的關係、③その間にできあがる「情報・思想・態度の共有」への関心の限定——に自己限定してきた問題性を批判している。「言葉が媒体となって関係をつく

るのではなく、関係を立てられて（現実的であれ想像上であれ）、はじめて言葉が出てくる」（竹内【1980:210】）。

例えば、テレビ番組の「利用-満足研究」にしても、番組と視聴者との間にある多様な媒介を検討する必要がある。

ある番組の視聴に入った人の生活背景と問題関心、その日の生活行動、心理状態、番組視聴中の集中度-電話がかかってきたり、家族が横から口をはさむといったことはないかどうか—などの質的次元での検討である。

竹内が示唆するように、送り手と受け手の関係は決して自明ではない。例えば、自覚的ではなくテレビ番組に接していたり、テレビをつけていながら読書もしたり、うたた寝するといったテレビのBGM的状态は、日常茶飯ではないか。

一方、想像力の次元についてのコミュニケーションについては、想像上の準拠他者問題が一つの鍵である。また、「地に根ざした想像力」に着目したリフトンは、これと、相対的に関連のない《イメージ》とを区別した。⁽⁵⁾前者は、外部に向かって新たなイメージや独創的形態を求め想像力を発揮する。だが、「正常」という名の感覚麻痺に陥っている人間は、なれ親しんでいる形態から遠く隔たって「外部に向かって想像する」ことは嫌がる、と彼は言う（R.J. Lifton【1976→1989:112-113】）。

《関係から言語へ》という竹内の示唆と、《古い形態への基礎づけに基盤をもつ地に根ざした想像力》というリフトンの考えには、生活世界での接点があると思う。

V 社会調査における相互性、コミュニケーション問題

V-1 インフォーマントとの関係変容

10年くらい前から初期シカゴ学派のパークの生き方に関心を抱き、関連文献を読んでいた時がある、もっとも印象に残っているのは、パー

クが学生たちを、「現実の社会に飛びこんで学ぶように」と鼓舞していたことである。パークは、知識、理論の鍛練を、あくまで現実の社会との関わりのなかで行おうとした。

短期大学という在学期間の短い学園で、学生たちに、社会調査の話を重ねるなか、「自分が今、身をおいて暮らしている生活の場から、社会と個人の関係について調査研究してみよう」という、実践性を次第に重視するようになったのは、当然の道筋であったと思う。

社会調査とは、《生活の学》としての多次元に及ぶ可能性を秘めている。

筆者がこれまで関わってきたききとり調査は、ひとり、もしくは複数であっても小人数の調査者によるものが大半である。ヒューマン・スケール、身の丈に合った社会調査の《質的》位相について考えてみよう。

社会調査の仕事を、職業的な研究者および研究者集団などのプロフェッショナルのみの営みとするのか、もっと、フレキシブルに大衆に開かれたもの、市民との共同調査の道を構想してゆくべきなのか——、この問題はこれからの分水嶺となるのではないか。

なぜならば、1770年代の J.ハワードの監獄調査、英国の C.ブースのロンドン労働者の踏査研究のように、社会調査のルーツは、社会的不平等、矛盾の原因を客観的、科学的に探り、矛盾の解決策を提示することにあつたからだ⁶⁾。

労働時間の短縮、余暇時間の増大のもと、生活者が自ら、日々の暮らしに対する等身大の調査を試みるための条件が徐々に熟してきたのではないだろうか。

国勢調査などの全数調査、無作為抽出法による大規模な数量的分析を目的とした調査、景気予測などで重視される統計分析、企業経営者に景気判断をきく傾向調査、ファッションの流行色調査など、様々な調査がある。その目的、方法、対象分野は、まさに多次元に及ぼう。

社会調査とは、社会学、政治学、経済学などの社会諸科学、歴史研究などの学術とともに、国家目的としての国勢調査や、ビジネス次元で

の民間シンクタンクの景気予測、環境保護運動などの活動グループの調査研究、さらにジャーナリストのルポルタージュなど、「社会の観察と記録、分析」をめざす、すべての機関と個人に開かれた《方法》ではないだろうか。

「社会学と社会調査とは別個のものではない」、「人間生活の現実の根をおろさない調査は、生活者を、研究主体の鋳型、操作化の対象としかねない」という川合隆男の指摘は、調査の根本にふれていよう（川合編1989:6-7）。

規模の大きな数量的調査にみられる、調査の計画は研究者が、実際のデータ収集は調査会社が、そしてデータ分析はまた研究者が行うといった分業に基づく調査には、生活者との直接的なふれあいが研究者に欠落してしまう。研究者もまた生活者である限り、調査研究のフィールドでの生の応答、やりとりを逸することは、社会研究の奥行きを狭めないだろうか。

以下では、筆者の個人生活史や地域紙の調査研究体験に基づく考察を述べてみたい。

社会調査について、興味ある問題点として、調査を計画、実施する《調査主体》の存在がある。「問うものは、逆に問われてこそ、コミュニケーションが始まる」のだから。

この、相互の往来性が乏しい調査と、往来性が生き生きと発揮される調査とを、分節化してみると、対面的状況でのききとりや、個別資料の読み取りに基づく《質的調査》の問題と可能性が検証できよう。

調査主体が身を置く状況と、その社会的役割に、多くの調査は一定の被拘束性を受けていよう。

筆者が、大学で、学生に「社会調査」の話をし、実際に、ききとり作業の試みをしてもらうときには、《出会い》としてのききとり準備のため、学生の個人的な発想、関心を第一に生かすことを勧める。

次いで、調査のおおまかな計画、補足調査、報告の仕方について説明し、対象者の絞りこみ、アポイントの取り方、インタビューの方法といった段階に入る。

注意することは、①ききとり相手のプライバシーを最大限に尊重すること、②ききとりを行う前に、社会問題の検討とともに、《どのようなことを聞くか》について、自分の問題意識を掘り下げる、③ききとりによって、相手との関係性、相互の信頼が深まり、今後の交流へのきっかけを見い出す④自分と相手との「個性」、人生の「志向性」の違いを見いだそう——といったことである。「できるだけ、ききとりを楽しく行ってほしい」と伝えることも忘れない。

ききとりが苦痛の経験となったのでは、「社会調査」への招待は失敗であろう。

学生たちの多くは、半年間の講義という制約も考え、高校時代のクラス・メート、アルバイト先の友人、自宅近くの知人といった身近な人を選んで、ききとりしている。「ふだんは冗談ばかり言いあっている友だちが、日本の社会について批判的な考えをしているのに驚いた」、
「自分の将来について、しっかりと考えて準備しているのに感心した」といった学生の報告に接し、《身をもって学ぶ》という、Doing Sociology の効用を感じる。

筆者は、個人の「生き方の変更」(研究報告では、翻身という用語を用いてきた)に社会学的な関心を抱いてきた。「どのように生きていくべきかは自明なことではないのでは」という問いは、研究者自らにも投げ返されよう。

以下では、個人生活史のききとりなどを通じた筆者の経験をも踏まえての記述である。フィールド・ワークに出かける際には、現地、インフォーマントについての資料を事前に入手して、対象についてのおおまかなイメージを培い、調査のポイントを絞る場合が少なくない。

これは、社会調査における「調査の状況予測」と言ってい。全くの無手勝流で、調査に入ることは、一般には無謀に近いことだ。ところが、いざインフォーマントに会ってみると、事前のイメージとは大幅にちがひ、「調査の状況予測」を根底から修正しなければならないことが数多くあった。抽象論的段階から実証的段階への踏み出しとは、まさに、この仮説の修正にあるので

はないか。

ききとりにおいて、一方的にききとりを進めるというのは、あたかも、主体-客体の二元論に陥る危険があろう。ききとりの対象者たるインフォーマントが、ききとり役の者に、《ききとりそれ自体の在り方》を含めて、逆に様々な問いを投げてきたとき、調査研究に本当の血が通うのではないか。

そうした、インフォーマントとの度重なる時間をかけた語らいを抜きにして、調査者は社会的、人間的リアリティに深くまでふれられるのだろうか？

この問題は、調査研究者が、インフォーマントの暮らす世界にどのように入って立ち去っていったのか、いかなる関係性を築くことができたのか(できなかったのか)という相互関係性の在り方に通じていよう。

社会調査においてこれまで語られてきた科学的視点には、デカルト以降の主体-客体の二元論という影が依然として残り、このことは大きな問題性をはらんでいると思う。

V-2 質的調査をめぐる

質的調査の役割は、例えば、ひとつの中小企業の経営をめぐる、経営理念、経営者の志向性、労使関係など組織構造、従業員個々人の企業との関係性、地域との結びつきなどについてトータルな把握を進めることにより、多次元に及ぶ《問題発見》および《問題解決》という実践的な役割があろう。これはプラグマティズムによる事例研究法である。

もっと根源的な役割としては、社会の因習、共同幻想に根ざす自明性を解体させ、社会を作り変えてゆくという役割があろう。これは、数量には還元不可能な、個々人の生活と人生の文脈の詳細を記録、分析するという独自の役割である。

とくに、人間の内面世界に根ざした個人生活史の記録、分析は、個々人が個性ある存在であるが故に、質的調査の果たす役割は大きい。質

的調査のプラグマティックな利点は、社会調査において、大規模な予算、多くの人員を必要条件とせず、調査者の経済事情、時間的制約に応じて、小回りのきいた形でスタートを切れることだろう。

その意味では、大規模な数量的調査が、官公庁、専門研究機関などで組織力のもと実施されるのに対して、質的調査は、組織力とは無縁な個人によって行うことができる。

質的調査によって発見されたデータは、社会問題についての個別具体的な手がかりともなる。数量的調査で問題とされる調査データの代表性、平均値といった指標とは、相互補完関係にある。

社会調査においても、あわただしい現代は、《速度》を求めているのだろうか？調査研究においても、《コスト対成果》が問われがちなのが、せち辛い現実だ。

筆者もまた、時間との格闘を少なからず余儀なくされた調査を続けるなか、「もっと、おおらかな調査研究を伸び伸びとしたい」という夢を抱いている。

そのことは、調査研究者のまなざしの、社会的因習へのとらわれのなさ、社会の一隅で生きる人々への《優しさ》に関わっているのではないか？人間への《優しさ》を置き忘れたような社会研究とは何か、という自己反省をこめて問題提起しておきたい。

ききとりでは、あらかじめ質問項目を用意しておき順に尋ねていく方が当初のデータ入手の効率はよい。何より、共同研究の場合には、複数の調査者がそれぞれ異なったインフォーマントからききとる訳であり、調査の基本的発想、目的と仮説、調査の期間、費用、発表方法などの枠組とともに、調査項目＝ききとりでの質問項目を共通化することが一般的であろう。

ただ、この方法は一方通行で機械的な観もあり、何より、質問したこと以外の話を聞き逃す恐れが大きい。

筆者も、地域新聞人への調査では、時間的制約を考え、この方法も用いている。しかし、自由な応答を重ねつつインフォーマントに自在に

語ってもらうことや、彼との関わり深い人物にもきいたり、手紙での応答、最大限の関連資料の入手などの複数の方法を組み合わせた方が、より立体的な奥行きのあるききとりとなる。

V-3 継続調査とフィードバック

質的調査では、研究者と、研究対象たる個人との関係変容が起り得るということは、様々な問題を生む。調査を、過去の一定の時点で終えてしまうのではなく、オープン・エンドな形で継続調査の意義は大きいだろう。

P.H.マンは、質的調査の手法としての参与観察(participant observation)について、その理想は、ある工場の調査ならば、そこに就職し、完全にその一員になることとしている。

「観察者を研究対象の集団の一員とすることにより、観察者と被観察者を同一の立場におこうとする」(P.H.Mann【1968→1982:124】)。

マンの言うような調査形態は、被観察者の《日常性》への最大限の着目にほかならない。

マンの言う参与観察法は、だれにでも簡単に実践することができるものではない。

限られた調査期間で、ひとつの調査を自己完結的なものとすることは、現実にはやむをえない面も大きい。研究者が立ち去った後も、その地域や職場での生活は続いていく限り、継続調査への配慮は重要であろう。

すなわち、第一次、二次と調査を重ねてゆく度に、研究対象である人々との関係は深まり、当初の作業仮説への、インフォーマントからの異議を含めたフィードバックが進もう。

フィードバックには、問いに対する沈黙なども含まれよう。

筆者は、ききとり体験を通じて、ききとり対象の方が《口ごもる》場面に何度も出くわした。口ごもりとは、何か。

一つには、ききとりが、身を切られるような《負の体験》にふれた場合、人は容易には表出

しない。

もう一つは、ききとりの場面での複雑錯綜した問題がある。プライバシーを配慮すると、《ここまで聞いていいのか》という、ためらいがあった場合、《突っ込んで聞こう》となるか、《抑制しよう》となるかは、その場での一瞬にかかってくる。

短期間の自己完結的な調査だと、ギリギリまで突っ込んで聞こうとする場合も多くなりがちである。しかし、継続調査が見込まれているならば、「無理を押しつけて聞かなくともいい」というスタンスをとれる。

VI おわりに——ディス・コミュニケーションと「社会的自由」

筆者はこれまで、現代における個々人の生活史にみる「人生の機会」(life-chance)、生き方の変更＝翻身(alternation)、さらに「社会のビジョン形成」に向けての選択の自由論を研究テーマとしてきた。

個々人は社会的存在であり、その文脈では、人は、他の人々や社会的事物の網の目のなかで、様々な出会いやふれあい、お互いの理解や誤解、信頼と反目、親交・淡交・断絶といった重層的次元で生活している。

個々人の《生活者》としての、社会についての視点もまた、静観、傍観、諦観という実践とは距離を置いたものから、思念、夢想を通じた想像力の次元、さらに実社会に積極的にコミットしてゆこうとするものまで、多様である。最後のものは、資本主義における企業家精神もあれば、社会運動を通じた社会改良まで幅広い。

社会学は、これらの多様な視点を最大限、相対化しつつ、社会分析の理論的実証的研究を通じて、個人と社会との関係の考察を図ってきた。

しかし、生活者は、価値の相対化というよりは、ときに、他者から見たら、かたくなとも言えるような、生活信条を形成し、それを支えとして生きてきたのではなからうか。《かたくなさ》を、主体としての生活者のひとつの属性と

する作業仮説を呈示しておこう。

社会学徒もまた、生活者として、価値の相対化のみならず、ある、かたくなさを内面化してはいないだろうか。

個々人は、相互にかたくなな主体であり、そうであるが故に、人と人の出会いと交わりには、無数のディス・コミュニケーションがあるのでないだろうか。ディス・コミュニケーションを、短兵急に非効率と切り棄てぬことこそ、社会の自由の要件ではあるまいか、という仮説を呈示したい。

最後に、徹底した自由主義経済論を展開したミーゼスの思想からの批判的摂取を課題として、この問題にふれよう。

ミーゼスは、資本主義社会の機能分析に対して、可視的なものだけではなく、不可視の位相に着目した。例えば、ミーゼスは、「給仕に出したボスの命令は、室内の誰にも聞こえる。聞こえないのは、顧客がボスに出した命令」と言う。

「社会的自由とは、自分が他人に依存していると同様に、他人も自分に依存していることを意味する」(V.Mises【1979→1980:37】)。

ミーゼスは、財界リーダーが市場経済を牽引するよう見えるのは《錯覚》であり、消費者からの信頼と愛顧が揺らぐとき、ビジネスは危機に陥ると指摘する。

資本主義では、日常の消費や学習などの生活行動から、職業、居住などの社会移動、表現の自由まで、市民は自らの生き方を選択できることにミーゼスはもっとも着目し、そのことが「自由の意味」だという。

しかし、現実の社会には、貧困、差別、不平等の矛盾があとを断たない。ミーゼスの言う自由は、社会的公正の原理に裏付けされ、公正と自由という視角からの検証が徹底的に図られたとき、強靱なものとならう。社会的現実を自明視、事実追認しがちなスタンスから、その自明性を問うスタンスへと視座の転換を進めていく

ことが、社会学の大きな役割であろう。

注

- 1) 構造機能主義は、社会システム存続のために、適応、目標達成、パターン維持、統合の4機能の充足を要件としている。だが、この概念図式では、社会的葛藤などの問題を説明しえないとの批判が呈示されている。
- 2) 生活変動に関しては、塩原勉他編〔1991〕など参照。
- 3) これらに関しては、船津衛〔1983〕、西原和久

編著〔1991〕など参照。

- 4) 青井和夫監修〔1987〕、石坂悦男編〔1987〕など参照。
- 5) リフトンは、自己形成過程における「地に根ざした想像力」の重要性を示唆している。R.J. Lifton〔1976→1989〕参照。
- 6) ブースは、ロンドンのイーストエンドの18万世帯を対象に、貧困実態の解明を目的とした調査研究を行った。

文献

- 有末賢 1983 「生活史研究の視角」『慶応義塾創立125年記念論文集』慶応大学
- 江原由美子 1978 「生きられる世界の理論をめざして」『ソシオロギス』第2号 ソシオロギス編集委員会
- 船津衛 1983 『自我の社会理論』恒星社厚生閣
- 藤岡喜愛 1974 『イメージと人間』日本放送出版協会
- Gorsen, P. 1972 'Kunst, Literatur und Psychopathologie' = ガーダマー, フォーグラール編 小岸昭訳 1979 「現代における美術・文学と精神病理学」『講座 現代の人間学3』白水社
- 石坂悦男編 1987 『マス・メディア産業の転換』有斐閣
- 片桐雅隆 1982 『日常世界の構成とシュツ社会学』時潮社
- 加藤春恵子 1986 『広場のコミュニケーション』勁草書房
- 川合隆雄編 1989 『近代日本社会調査史(Ⅰ)』慶応通信
- 1991 『近代日本社会調査史(Ⅱ)』慶応通信
- 公文俊平 1978 『社会システム論』日本経済新聞社
- 蔵内数太 1960 『社会学』培風館
- Lifton, R.J. 1976 *The Life of the Self* = 渡辺牧, 水野節夫訳 1989 『現代(いま), 死にふれて生きる』有信堂
- 真木悠介 1977 『現代社会の存立構造』筑摩書房
- Mann, P.H. 1968 *Methods of Sociological Enquiry* = 中野正大訳 1982 『社会調査を学ぶ人のために』世界思想社
- Mises, L.V. 1979 *Economic Policy* = 村田稔雄訳 1980 『自由への決断』広文社
- 宮本常一 1963 『民衆の知恵を訪ねて』未来社
- 水野節夫 1986 「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修『社会学の歴史的展開』サイエンス社
- 永井民枝 1989 『農婦』日本経済評論社
- 中野卓 1977 『口述の生活史』御茶の水書房
- 西原和久編著 1991 『現象学的社会学の展開』青土社
- 大出春江 1986 「産む文化—ある開業助産婦のライフ・ヒストリー(1)」『上智大学 社会学論集10』上智大学
- 大村英昭・宝月誠 1979 『逸脱の社会学』新曜社
- 小川博司 1988 『音楽する社会』勁草書房
- 桜井厚 1986 「主観的リアリティとしてのライフ・ヒストリー」『中京大学社会学部紀要』(1-1)

- 作田啓一 1981 『個人主義の運命』 岩波書店
- 佐々木斐夫 1989 『認識社会学の方法序説』 いなほ書房
- 佐藤毅 1987 「コミュニケーション主体の現代的状況」 青井和夫監修『コミュニケーション社会学』 サイエンス社
- 島崎敏樹 1976 『人格の病』 みすず書房
- 塩原勉他編 1991 『現代日本の生活変動』 世界思想社
- 塩見鮮一郎 1982 『言語と差別』 せきた書房
- 竹内成明 1980 『闊達な愚者』 れんが書房新社
- 滝沢正樹 1976 『コミュニケーションの社会理論』 新評論
- 塚本三夫 1987 「コミュニケーションの論理と構造」 青井和夫監修『コミュニケーション社会学』 サイエンス社
- 渡辺牧 1982 「志向性の社会学序説」『ソシオロゴス』第6号 ソシオロゴス編集委員会
- 1984 「翻身論序説」『ソシオロゴス』第8号 ソシオロゴス編集委員会
- 1988 「『他者とのコミュニケーション』への分析視角」『共栄学園短期大学研究紀要』第4号
- 矢谷慈国 1989 『生活世界と多元的リアリティ』 関西学院大学生生活共同組合出版会
- 吉田民人編著 1978 『社会学』 日本評論社
- 文献挙示は〈ソシオロゴス方式〉に依る ——